片目の緋鯉

荒川（隅田川）の主ぬしとしてよく知られる。小さな鯨ほどある体が浮かび上がると、周囲3 間（約5.45m）の川の水が赤く染まったように見えたと伝わる。江戸時代、架橋の工事の際に打ち込んだ杭くいに、この緋鯉がたびたびぶつかって倒れそうになった。やむなく網や鳶とび口くちを使って押さえたところ、鳶口で片目をつぶされたまま網を破り、逃げ去った。以後は杭と杭の間の1 カ所を少し広げ、緋鯉が自由に泳ぐことができるようにしてやったという。

（歩いて学ぼう南千住検定より）